特に所謂 Zephyrus 屬を顧慮しての日本帝國產Theclinae亞科の分類に對する寄稿 (I)

柴谷篤弘・伊藤修四郎著

岡田慶夫譯

本稿は柴谷篤弘・伊藤修四郎の2氏共著の獨文の論文,BEITRAG ZUR SYSTEMATIK DER THELINAE IM KAISERERREICH JAPAN UNTER BESONDERER BERÜCKSICHTIGUNG DER SOGENANNTAN GATTUNG ZEPHYRUS (TENTHREDO ; Vol. III, No. 4, March, 1942) の譯文である.

著者の二人は私の母校京都一中の先輩であり,若い蝶類學徒である.柴谷氏は一中・三高を經て京大理學部,動物學教室に在學中,その鱗翅目の外部生殖器に依る分類は最近のZEPHYRUS. 關西昆虫學會會報に於て示された如く,偉大なるもので,私はその分類には無條件に服從してゐる次第である.併し近頃鱗翅目の研究も止められ,今後專ら一般動物學,生命の問題に對して進まれるとか,生物全體性の學徒としての氏の成功を祈る次第である.伊藤氏は一中,京都高蠶を經て,九州帝大農學部,昆虫學教室に存學中,中學校時代からの柴谷氏の親友で,ウラナミジヤノメの分類等を研究されてゐる,蠅を專攻して居られるとか.

氣が合つた御二人の論文は獨文で34頁て亘り,主として交尾器から Theclinae の分類に對する意見をのべたもので,Theclinae の分類に新世紀を開いたものであり,近頃 Theclinae を論ずる人は皆本書の分類に基いてゐる.實に Theclinae 分類の基本を示すものであり,今後この方面を研究する人のよき入門書となるであらう.

本書は獨文で書かれてあるだけに解說的であり,依て我々にはよき入門書となるものである.私は獨逸語の受業1ヶ年の淺學をかへり見ず敢へて本譯文を諸賢に送る.

---

1. 日本帝國產 Theclinae の一般考察

舊北區の Polyommatinae 亞科の分類は近年多くの研究家の詳細な研究を經て,先へ先へと改良され,今日すでに相當の信賴を以て,將來更にその分類と命名に驚くべき變化が行はれないと思はる.併し,矛盾した廣大な亞斗 Theclinae の組織については未だ知られてゐない.此の事實は人が容易に認める事が出來るやうに,Polyommatinae は舊北系の鱗翅目についてのすべての偉大なる分類學的研究を有するヨーロツパに,非常に多くの代

表種を有したに反し，舊北系の Theclinae の主領域はヨーロツパでなくして東亜にあるに基く．何はさておき日本はその分布地を，東亜と印度の他のわづかな例外のみに限られた，小灰蝶のこの群，所謂 Zephyrus 屬に富んでゐる．

所謂 Zephyrns 屬の多くの種は中部日本でしばしば發見される．併し他の場所ではほんのわづかで，この屬の種の多數は稀種である．しかも大いに人々は總ての蝶の中でその華美な形態をもてはやす事が出來る．自然，日本の蚊蝶の蒐集家は全く，特にこの屬を愛してゐる．殘念乍らこの屬の總ての種を我々の蒐集に於て，研究に採用する事が出來なかつた．故に我々は目前の研究に於て唯一つの種類を斟酌せぬやうにしなければならなかつたのである．

日本の小灰蝶の調査の初頭に於てこの屬に2つの屬名：Thecla FABRIUS (1809) と Dipsas WESTWOOD (1852) が使用に供された．Thecla 屬は以前，舊 Lycaena 近似の一大屬である．屬名 Dipsas はすでに LAURENTI(1768)，LEECH (1814) と RAFINESQUE (1820) に依り先取され，homonym として命名より除去せらるべきである．一方 Thecla FABRIUS は先に長く日本の w-album 屬に用ひられた．其後 Dipsas WESTWOOD の代りに Papilio betulae LINNÉ をタイプとする屬名 Zephyrus DALMAN (1816) が今日の Zephyrus 屬の枠を確立した LEECH に依り取入れられた．併し當時 LEECH は其上 Zephyrus 屬の種は恐らく數個の新しい屬に清算さるべきだと指示した．かゝる清算は實は TUTT から部分的に試みられた，併し其後 SEITZ は LEECH の分類に全く從つた．そして Zephyrus 屬は全蝶類學者にとつて一つの定まつた影像となつた．やうやく1933年 HEMMING は永く不明で殘されてゐた Thecla 屬のタイプが全く Zephyrus 屬のそれ，即ち Papilio betulae LINNE に他ならぬ事を指摘し，依て Zephytus 屬は全く Thecla 屬の synonym である事を示した．併し HEMMING の指示は決して屬の本質に基いてゐない，依て吾人はこの事情の下に，Theclinae の要求に應ずるグループに對する正しい名前としての Thecla を承認せねばならぬ．

併し我々の意見では，從來の Zephyrus 屬は自然的でなくて人爲的で，大抵習慣的な印象でその中に最も不等質の種が雜然と整理された，總括したグループであつた．依て我々は主としてこのグループの SEITZ の分類の交尾器研究の基礎をすでに準備されたものとして固守しないで，こゝに殘りの多くの Theclinae の種と共に從來の Zephyrus 屬の種の新に記載せる系列を，我々の研究結果に伴つて齎らす次第である．

それが我々のこのグループの組織的研究を爲す爲の直接原因であつたのだが，最近 T. ESAKI 博士[1]がほとんど全部の日本產 Zephyrus 屬の種をすぐれた圖版を以て圖解され特に研究史的，命名規約的に入込んだ研究をされたことは，日本產 Theclinae の研究に

とつて重要な意味がある．我々の研究の全過程に於て T. SIROZU[2]氏は非常な友情を以て常に援助された，我々はこゝに最高の謝意を表す．研究資料・文献其他の助成を共上次の諸氏に負つてゐる．

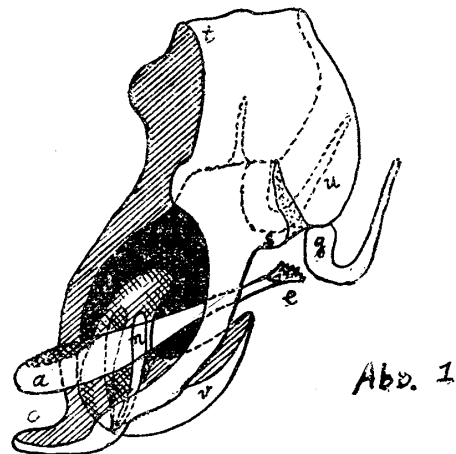
Y. ARAKI 氏[3]，教授 T. ESAKI 博士，H. KADOTA 氏[4]，T. KIMURA 氏[5]，Y. KISHIDA 氏[6]，N. KOIZUMI 氏[7]，Y. KURIHARA 博士[8]，T. MINOURA 教授[9]，S. MURAYAMA 氏[10]，Y. NARITOMI 氏[11]，K. OKA 氏[12]，K. OGURA 氏[13]，D. M. SEOK 氏[14]，J. SONAN 氏[15]，I. SUGITANI 教授[16]，H. TAKASHIMA 氏[17]，K. TAKEUCHI 氏[18]，M. TOKUNAGA 博士[19]，N. TOSAWA 氏[20]，K. YASUMATU 氏[21]．尙我々は S. TAKAHASI 氏の顯微鏡研究と，筆者の一人 S. ITO が屬する京都蠶糸學校の生物學會の實驗室を提供された大なる便宜に對し；感謝して言及する．

尙先づ2つの注意がある．

繰返し混同する雄性交尾器官の術語の爲に我々は次に Theclinae 交尾器の模式圖を提示する．多くの Theclinae の種の交尾器構造は非常に相異してゐる．その事については後に述べねばならない．

總ての交尾器は冷いか，又は煮た加里滷液中でやはらかくされ，圖は製圖用具の助けを借りて仕上げられる．研究の技術については我々はこゝに特別述べるべきものがない．

昆虫に關するすべての分類學的研究に於て，勿論人は最近特にFORSTER (1936) から强調された次の命題を度外視する事を許されない．"全く唯一の特徴を精査するといふ事は常に誤りであり，唯全特徴を斟酌する事，依て一動物の全體的印象から終極的目標に導く事が出來る．そこで一特徴の分類學的價値は場合場合に依り，非常に異る事が出來る．"

---

① 江崎悌三博士：――"日本産 Zephyrns 綜說"(11～6) Zephyrus, vol v～Vii (1934～38) を指してゐる．

② 白水隆，③ 荒木康守氏，④ 門田元氏，⑤ 木村氏，⑥ 岸田雄二氏，⑦ 小泉直一氏，
⑧ 栗原善夫博士，⑨ 箕浦忠愛教授，⑩ 村山修一氏，⑪ 成富安信氏，⑫ 岡慶太郎氏，
⑬ 小椋康生氏，⑭ 石宙明氏，⑮ 楚南仁博氏，⑯ 杉谷岩彦教授，⑰ 高島春雄氏，
⑱ 竹內吉藏氏，⑲ 德永雅明教授，⑳ 戸澤信義氏，㉑ 安松京三氏，

Abb. 1, Theclinae 雄性交尾器附屬物，模式圖 (1)

a : Aedoeagus, c : Saccus, e : Vesica, g : Uncushaken,

n : Anellus, s : Socii, t : Tegumen, u : Uncus, v : Valven,

交尾器はたとひそれが常には種の區別に用ひられなくとも，少數の屬に於ける種の總ての整理に於て疑ひもなく決定的な價値がある．併し勿論多くの群に於て，屬の主要標徴は，屢々他にあるといふ事は決して忘れらるべきものでない．習慣的にはつきりと別離される種であるが，その交尾器が非常に似，或はほとんど同じである様な種がある．この場合，屬の特徴として Valven の小さな差異を顧慮せねばならぬ．そうすれば交尾器の總ての特徴に依り．最も明らかに分類される．僅かな不定の特徴，例へば Saccus 又は Anellus はかくの如き群の近接した屬では非常に統一的である．そして前者は分類學のより高次の部類で區別する．依て，Valven は屬に對し，Anellus や他の諸特徴は亜科等に對して重要な區別標徴として用ひられる．又それに反し，外見の非常なる相似にも不拘，その交尾器構造中に特別の大なる不定さを示すいくらかの種がある．此等の屬に於ては，かくて交尾器組織は少數の種の區別に對して常に一重要な役割を演ずる．併し，屬の性質としてはそれは關與せらるべきでない．其上 Valven の變化は折々近接種の間にほとんど近似關係が認められない程顯著な事がある．ところで Saccus 等は明らかに相似的に變化し得る，依て人は習慣的印象の著るしい類似性にも不拘，明らかに整理された種の群の，この標徴に向つて分たれた屬として考察するといふ强制を犯す．かくて人はこの場合 Valven の組織は種の區別のみに用ひらるべきだ．そして屬の性質として，概してわづかに變化し得る特徴を注視せざるを得ない．故に分類に於て，唯交尾器の一部分，例へば Uncus, Uncushaken, Valven, Aedoeagus を調査し，殘りの部分即ち Anellus, Saccus, Socii を顧慮しないのは，交尾器又は外見の唯一つに依て分類を決定するのが誤りであると同様，全く誤りである．依て交尾器の一部分の分類學的價値は全く不確實なものである．

それに對し尙たしかに次の問が發せられる：── 今若干の場合，屬の特性として如何なる標徴が認められるべきか？ ── 屢々强調した如く，相似の種の交尾器相互は近接せねばならない事は明らかである．併し習慣的に近似な種は通常最も近い親類である．といふ事も又正しい．若し交尾器に於て組立てられた組織が習慣的印象から非常に區別されれば，それは誤りだとせねばならぬ．かくして分類學に對する解剖學的特徴は，常に或程度外見と一致する結果を保つやうな方法に於て選ばねばならぬ．若し人が上述の事を顧慮し

(1) 本論文の交尾器各部の精しい事は，柴谷氏の“鱗翅目の雄性交尾器について”昆蟲界，No. 103 (1942) を參照されるとよい．

ないならば，人は唯混亂のみを得るであらう．この基礎に基いて人は交尾器を一つの特徴物として見る事が出來る，そしてそれは次の斟酌に於て決定的である．：—— 相當數の群に於ける若干の種の試みの整理が，外見の立場からして如何なる程度に承認されるか？

（つづく）

Oeneis の畸型2種

1) Oeneis daisetsuzana ♀

先日，東京某氏から私に御送り下さつたもので，大體4翅共全般に亙つて翅脈がちぢれてゐる．開張は正常型と變りなく，色彩も大差ない．併し左觸角は正常な右觸角の半分より更に短く，はるか黒色を帶び太い．26/vii, 1941，大雪山產．

2) Oeneis jutta asamana ♀

左前翅端のちぢれたもの．一部分の翅は穴が開き，翅脈のみが殘つてゐる．肩部が破損してゐるので精しい事は判らない．25/vii, 1944，日本アルプス常念岳產．

筆者採集，並に保存． （岡田慶夫）